OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 公益財団法人 結核予防会結核研究所 日本の結核対策の知見を世界へ : 80年以上の実績を有する結核研究所 |
| Author(s) | 山田, 則男; 加藤, 誠也 |
| Citation | 目で見るWHO. 2020, 74, p. 14-15 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/86515 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 公益財団法人 結核予防会結核研究所
# 日本の結核対策の知見を世界へ
# ～80年以上の実績を有する結核研究所～

国際協力・結核国際情報センター長
山田　則男
1988年、新潟大学医学部卒業。1991年より結核研究所、2008年より現職

所長
加藤　誠也
1981年、札幌医科大学医学部卒業。呼吸内科の臨床・地方行政に携わった後、2000年より結核研究所、2017年より現職。

## はじめに
## 結核予防会結核研究所の概要

結核予防会は1939年に当時の皇后陛下（香淳皇后）の令によって設立された公益法人です。結核は当時、死亡原因の第1位で国民病と呼ばれて恐れられていました。結核研究所は以来、一貫して対策に役立つ実際的な研究と人材育成や対策への技術的な貢献を使命としています。現在の組織は臨床・疫学部、対策支援部、抗酸菌部、生態防御部、国際協力・結核国際情報センター及び事務部から構成されており、厚生労働省からの補助金、競争的研究資金、委託研究費、結核予防会からの繰り入れ、寄付金等によって運営されています。本研究所の特徴は、国内及び国際的な視野に立って、抗酸菌や生体の防御機構といった基礎医学から、臨床医学、さらに疫学や対策等の社会医学まで幅広い分野にわたり、結核に関する研究や技術支援を実施していることにあります。

写真1　結核研究所の外観

## WHO協力センター
## としての活動

1982年にWHO協力センターに指定され、結核に関する研修、研究、結核菌検査の技術支援を役割としています。

(1) 国際研修

国際研修は開始当初よりWHOと協力の下に日本国際協力機構（JICA）からの委託により実施してまいりました。1963年から50年以上の歴史がありますが、WHOの世界戦略に沿って内容を発展させており、近年はonline方式の活用によって、WHOスタッフによる講義の機会が増えました。対策官向けコースは，疫学や対策に関する基本的な知識や演習、WHOが進めるEnd TB Strategyに基づきHIV合併、多剤耐性や戦後の著しい蔓延状況から日本が罹患率を低下させた経験などを学び、終了時に向けてoperational researchの計画やaction planを策定します。検査室コースは実技を重視した研修が特徴です。結核対策の基礎的な知識、結核菌の塗抹・培養、近年は遺伝子検査等の新技術にも力を入れています。両コースとも研修旅行では日本の地域における対策の実情や風土や文化に触れる機会があるほか、清瀬市のボランティアの方々の協力によって日本語教室やホームステイが用意されており、地域に根付いた研修になっております。毎年開催される国際結核胸部疾患連合の年次総会の際には、研修修了者の同窓会を開催し、毎年修了者に対して、Newsletterを配信・発送するなどネットワークの維持にも配慮しています。なお、このJICA研修以外にも各国からの要請等により随時研修を行っています。これまで実施した研修には98カ国から2,391名が修了しており、それぞれの国の結核対策の責任者、さらには保健行政全般に貢献して保健大臣やWHO等の国際機関のスタッフとして活躍している人もいます。

(2) 疫学調査への支援

結核の蔓延状況の把握のために各国でサーベイランス・システムが構築されていますが、診断されない患者や報告されない患者がいるために、実態を把握するためには、疫学調査が必要です。近年、

写真３　研修旅行（秋田県大仙市）

写真４　デジタルX線撮影指導（ネパール結核有病率調査）

写真２　ラボ研修：結核菌薬剤感受性試験の培地に加える薬液を作成。
リベリアとマレーシアからの参加者です

WHO は結核研究所 OB である小野崎郁史先生を中心に胸部X線検査を積極的に用いた有病率調査を展開してきました。本研究所はこれまでに、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、タイ、モンゴル、スーダン、ジンバブエ、バングラデシュ、ネパールの有病率調査や薬剤耐性調査の技術支援を行ってきました。

(3) 結核の Supranational Reference Laboratory としての活動

結核研究所は世界 32 か所の Supranational Reference Laboratory(SRL) の一つに指定されています。SRL の機能は各国のリファレンス検査室の支援であり、薬剤感受性検査については、精度管理用検体を送付し、各国の検査結果の評価を行っています。

## WHOへの貢献

(1) 各種委員の就任及び人材の提供

筆者は現在、WHO 本部の Strategic Technical Advisory Group (STAG: 結核戦略技術諮問委員会) 及び WHO 西太平洋事務局の TAG の委員を拝命しています。一部の職員は WHO 本部の Global Laboratory Initiative (GLI: 世界検査構想)、西太平洋事務局の Green Light Committee (rGLC: 薬剤耐性結核委員会) のメンバーやガイドラインの策定委員を務めております。また、結核研究所の OB や研修修了者が、WHO の本部・地域事務所・各国事務所において、活躍しています。

(2) ワークショップの開催

2019 年には WHO 西太平洋事務局と共同で、10 か国からの担当者及び企業が参加の下に結核菌検査のワークショップを開催し、WHO 及び参加者から好評を得ました。

## 国際的な活動

(1) 国際協力事業

結核予防会本部の国際部と連携しながら、JICA や外務省等の資金によって、国際協力事業を行っています。これまでに実施した国は、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、ネパール、バングラディッシュ、パキスタン、アフガニスタン、イエメン、ザンビア等々です。

(2) 研究事業

日本医療研究開発機構 (AMED) の研究資金によって結核菌ゲノムデーターベースを構築しています。本研究に参加している国・地域は中国、韓国、台湾、モンゴル、フィリピン、ベトナムで、既に 5,000 株以上の全ゲノムデータと薬剤感受性検査の結果が集積されており、世界有数の規模になっています。他にもベトナム、タイでの基礎や疫学の研究、また、外国出生者の対策では米国、英国、オーストラリアなどの研究機関とも連携しております。

## おわりに

結核予防会結核研究所は「日本を代表する世界の研究所」として、今後ともWHO との密接な連携を維持しながら、日本及び世界の結核対策の発展に寄与していきます。